

## 現代日本の高校生における対人関係特性

### —40年前との比較—

下権谷久和\*・菅原正和\*\*

(2005年1月20日受理)

Hisakazu SHIMOGONYA, Masakazu SUGAWARA

Declining Abilities of Interpersonal Relationships  
among Japanese High School Students

### I はじめに

文部科学省の国際比較調査報告(2003)によると、日本の全日制高校の進学率は94.2%、そして米国88.9%(1997)、英国70.5%(1998)となっており他の先進国と比べても、かなり高い進学率を示している。しかし日本における約14万人に迫る不登校の児童生徒以外に、所謂潜在的グレイゾーンの存在が危惧されると同様、進学率の高さは必ずしも高校生活に肯定的感情を持って生徒達が通学している事を意味していない。

学校不適応対策委員会(1991)は、生徒が不登校にいたる背景として、友人関係や教師との関係など学校環境における対人関係の問題があることを指摘してきた。その指摘から10年以上の間、学校現場では様々な対策や指導(例、ソーシャルスキルトレーニング、グループエンカウンター、アサーショントレーニング等の導入)が重ねられてきたが、未だ不登校などの学校不適応は減少したとはいえ、長期的な効果はなかなか見い出されていないのが現状である。対人関係能力の低下を重視し注目しながらも、それを改善することができないでいるというのが教育現場の実態である。

本報告は、現代の高校生の間人関係における特徴を明らかにし、特に対人関係でどのような感情を抱きながら通学しているのか、40年前と同一の心理尺度による調査結果と比較しながらその実態を調べ、教師の生徒理解に役立てたい。

### II 問題と目的

教育現場における不登校(表1)問題や具体的な学校不適応(心理的モラトリアム、脱力感、怠惰、目的の欠落、引きこもり、うつ状態)よりもっと初期の段階で憂慮される点は、高校生が普段の学校生活をどのような感情を持ちながら過ごしているのだろうかということである。そして、その感情を左右している要因は何なのであろうか。伊藤(1988)は不登校児童生徒の増大の背景として、産業構造の急激な変化や都市化により地域共同体とそこでの意識構造も急速に変化し、それにより地域文化に対する親近感が希薄化して共同体意識が乏しくなっていったことを指摘している。加えて、遊び場

\* 岩手県立久慈東高等学校    \*\* 岩手大学教育学部

が制限され、仲間や同胞の少なくなったことなども、交友が不得手で積極性に欠ける子どもにとって不利な条件になっていったとしている。

青年期の自我発達は文化社会的環境の影響を強く受ける。対人関係には自己に対する反応である内的対人関係 (intrapersonal relationship) と、他者との文字どおりの対人関係 (interpersonal relationship) があり、青年期はまさにこの intrapersonal relationship と interpersonal relationship とが交互に影響しあって自我同一性を形成する時期である (西園, 1977)。青年期における対人関係には通常発達的变化が見られ、まず intrapersonal relationship の発達に伴ない、自己が関わろうとする相手の範囲の変化と関わり方の深度に関する変化 (落合・佐藤, 1996) が生じる。自我形成過程でのさまざまな対人的な関わりの中で生じる不適応症状に、日本の青年に特有のものといわれている視線恐怖や自己臭恐怖がある。近年他者との関係において、過度の不安と緊張から自分が軽蔑されるのではないかと、嫌われるのではないかと案じ、関係をできるかぎり避けてひきこもる青年の増加が憂慮されている。これは、恥や遠慮を重んじる風土の中では育ちやすく、村上 (1981) は、対人恐怖の青年たちは、他者に対して自己を主張していく安定した基盤を欠いていることが多く、家族からの離脱にともなう友人関係などの対人関係の広がりや円滑に結んでいくことができず、現実とかけはなれた自己像に理想を抱き現実から遊離していく傾向がある事を指摘している。対人関係と感情の表出の仕方について齋藤 (1986) は、国内外の多くの研究をレビューし、感情の研究には人間関係的アプローチが特に重要であるとしている。そして情動は他者との関係で生じ、特定の文化圏および対人関係内で形成された価値観及び有能感と密接に関連して表出する (Duck, 1995)。

神経症的傾向という概念を用い対人関係について鋭い分析をした研究者に、ドイツの精神科医 Karen Horney (1942, 1945, 1950) がいる。彼女の古典的理論における神経症的傾向とは、本質的要素は無意識的で、以下のような特徴があるとしている。顕著な特徴は強迫性であるが、その出現形態に2通りあり、第1は目的追求が無差別に行われる場合、強迫性の第2の特徴は、神経症的傾向を表出する事を防ごうとして生じる不安とその反動で安全弁的働きをしている場合である。Horney は神経症的な人間の基本的葛藤を、彼らが他人に対して抱くに至った根本的に矛盾した態度の中に見、それを①「人々の方に動く」指向性、②「人々に対して動く」指向性、③「人々から離れる」指向性の3つに分類している。それぞれの特徴を要約すると、①の「人々の方に動く」タイプは、自分が無気力であると強く感じており、そこで強迫的に他人に依存し承認を得ようとする。②の「人々に対して動く」タイプは、強いことが絶対であり、力を得ることに絶対の努力が払われる。そして思いやりを偽善的行為とみなす。③の「人々から離れる」タイプは、他人と感情的な関わり合いを持つことを一切避けようとし、自給自足を望み病気をひどく恐れ、拘束を嫌い、プライバシーの侵害を強く嫌う。古典的精神分析学 (psychoanalysis) に起源を有する Horney の神経症的傾向に関する対人関係理論は、今日の研究水準から見るといくつかの修正を要する。

本報告では以下2点について主に検討する。(1)40年前に用いられたものと同じの心理尺度「基本的対人態度インベントリー」を用いて、現代日本の高校生の感情と対人関係は40年前の青年と如何なる変化 (又は異同) が生じているのかを明らかにする。(2)現代の高校生の「基本的対人態度」と「感情」の相互作用を分析し、positive feeling の高い生徒と低い生徒の質的差異を明らかにして、具体的不適応要因について考察する。

表1 不登校児童生徒数の推移（年間30日以上の欠席者）

	小学校	中学校	合計
平成10年度	26,017	101,675	127,692
平成11年度	26,047	104,180	130,227
平成12年度	26,373	107,913	134,286
平成13年度	26,511	112,211	138,722
平成14年度	25,869	105,383	131,252

（備考）文部科学省 不登校を考える会「生徒指導上の諸問題の現状について（概要）」第5章不登校（国・公・私立学校における不登校児童生徒の状況：学校基本調査，2003）による。

	小学校	中学校	高等学校	合計
平成8年度	173	736	748	1,657
平成9年度	175	802	826	1,803
平成10年度	224	1,032	864	2,120
平成11年度	245	1,060	841	2,146
平成12年度	242	1,058	815	2,115

（備考）上記（文部科学省）調査には、高等学校の統計がないため、参考にI県の調査結果を示す。I県教育委員会不登校児童生徒の状況とその対応について」（2001）を参照。

### Ⅲ 方 法

#### (1) 対人態度と感情実態の調査

**調査対象** 東北地方，中国地方，九州地方の公立および私立高等学校1年生から3年生までの828名（男子375名 女子453名）を調査対象とした。

#### 調査時期と手続き

2002年，2003年，調査対象の高校生に基本的対人態度測定インベントリー（西平，1964）および感情ワークシートを配布，実施し回答は郵送または直接回収した。本調査の実施に際し，担任や在学校の教師が回答に目を通すことはないこと，そして回答が学校の成績や進路に一切関係がないことを事前に説明した後に記入してもらった。

Horneyの理論をもとにして作成された西平（1964）の基本的対人態度測定インベントリーは，基本的対人態度を3つのタイプで示し，T型（依存－親和型），A型（敵対－指型），I型（孤立－独創型）の3つの下位尺度からなる。本研究は現代の高校生の実態を正確に把握することが目的なので，因子構造そのものにも注目しすべての項目結果に因子分析（主因子法，バリマックス回転）を施し，5件法（4：非常にそうだと思う，3：まあそういえる，2：普通の程度，1：必ずしもそうでない，0：決してそういえない）で回答を求めた。その結果，4因子（「敵対・支配」・「被評価意識・積極性」・「孤立・独立」・「依存・親和」）が抽出された。4因子の累積寄与率は42.8%，バリマックス回転後の各項目の因子負荷量を表2に示す。感情の測定はワークシートを作成し，「学校において最もよく感じる感情はどんな感情か」に焦点を絞り，その原因と感情への影響の強さを記述で答える形式を採用した。

## (2) 「基本的対人態度インベントリー」と「感情」の相互作用

**調査対象** 上記調査と同じく調査対象は東北地方、中国地方、九州地方の公立および私立高等学校1年生から3年生までの828名のうちの582名（男207名 女子375名）を対象とした。また、(1)の感情に関する現状を具体的に検討するため、公立高校A高校1年生から3年生までの379名（男子235名 女子144名）および公立高校B高校1年生から3年生までの349名（男子152名 女子197名）を対象として行動観察も取り入れた。

**調査時期と手続き** 2003年10月。基本的対人態度測定インベントリーによって抽出された4つの因子を得点化し、感情ワークシートによって得られた感情（positive feeling-negative feeling, 以下 PF vs.NF）について検定した。なお、分析にあたっては、統計ソフト Stat View version 5.0を使用、行動観察は、2002、2003年に実施した。(1)で得られたデータを学校ごとに分類し、各学校間の生徒の様子や各学校における教育目標などについては、在籍する教師との面談をもとに、研究者も一教員として在籍しながら調査を行った。

## IV 結 果

## (1) A. 対人態度の現状

西平（1964）の基本的対人態度測定インベントリーを因子分析し直し、これまでの3因子構造ではなく4因子構造（敵対・支配、被評価意識・積極性、孤立・独立、依存・親和）となっており、それぞれの得点を算出して各項目の平均値と比較した。その結果を表3に示す。

次に、表3の結果をもとに4因子のバランスを見るためにレーダーチャートにして示したのが図1である。基本的対人態度はどれか1つが優れていれば良いものではなく、それぞれがバランスよく保たれることによって、基本的対人態度が安定したものになる（西平、1964）。実際、西平の分析では3因子構造のバランスとして考えていたが、基本的な構造は同じであるので、4因子構造でのバランスをレーダーチャートで表した（形の整った四角形になることが望ましいとされる）。なお、4項目のバランスを正確に測るため、各項目の最大値を統一して、得点を算出してある。

現代の高校生は、敵対・支配、被評価意識・積極性、孤立・独立因子において、平均値よりも低い得点を示すが、依存・親和因子においては平均値を上回る得点を示している。このことは、現代の高校生は「誰かと一緒にいたい」「繋がりを持っていたい」「自分の居場所を確保したい」という依存・親和に偏る傾向が強まっている事を示している。

西平が1964年に分析した時点では、3因子構造であったものが現代の高校生にとってはあてはまらなかったため、40年前の青年と現代の高校生の比較を分かりやすくするために、当時と同じ3因子構造で得点を算出し比較したものを表4に、そして両者のバランスを示したレーダーチャートを図2に示す。現代の高校生は、A型（敵対・指導）とI型（孤立・独創）において、どちらも約5ポイント程得点が低い。この結果から、現代の高校生は、40年前の青年に比べ権威主義的ではないが積極性も低く、豊かな創造性も低くなっている。また、総じて基本的対人態度の得点は低くなっているが、この結果が現代の高校生の基本的対人態度が全て低下しているという意味ではなく、40年前の青年とは対人態度の質が大きく変化しているという意味である。更に本研究の因子分析の結果が4因子構造になる理由は、基本的対人態度測定インベントリー自体が安定していないということではなく、約40年の月日を経て、青年の対人態度の構造そのものが大きく変化していることが主たる原因であると考えられる。

表2 基本的対人態度測定インベントリー項目の因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	因子4
私は一般に反抗的である。	0.694	-0.062	-0.022	0.019
私は人に対して傲慢（ごうまん）である。	0.610	0.063	0.184	-0.045
私は人からこわい人だと思われている。	0.608	0.135	0.037	-0.040
私は人から冷たい人だと思われている。	0.591	-0.115	0.257	-0.154
私は人と争うこと（ケンカ・口論）が多い。	0.582	0.058	-0.116	0.067
私は人から頼もしい人だと思われている。	0.092	0.762	-0.018	-0.014
私は年下の人から尊敬される。	0.020	0.689	0.019	-0.094
私は人から暖かい人だと思われている。	-0.211	0.662	0.030	0.169
私は人を指導（リード）する力がある。	0.239	0.636	-0.187	-0.036
私は年上の人から可愛がられる。	0.064	0.582	0.059	0.050
私は人に対して暖かく世話することが好きだ。	-0.197	0.461	-0.030	0.366
私は人と会いたくないことが多い。	0.223	-0.188	0.625	-0.105
私は人に対して臆病で逃げ腰である。	0.109	-0.259	0.618	0.261
私は一人で本を読んだり散歩することを好む。	-0.012	0.075	0.588	-0.151
わたしは一人でコツコツ仕事をするを好む。	-0.104	0.202	0.585	-0.106
私は人生は結局孤独（ひとりぼっち）なのだと思う。	0.367	-0.115	0.581	-0.118
私は人生はなんとなく心細く、恐ろしいと思う。	0.237	-0.132	0.507	0.271
私は人から謹厳（きんげん）な人だと思われている。	-0.188	0.235	0.489	0.063
私は人のいうことを気にする方だ。	0.026	-0.119	0.249	0.644
私は人がいないと寂しいので、いつも人と一緒にいたい。	0.183	0.126	-0.284	0.559
私は人のいうことに無関心な方だ。	0.293	-0.083	0.138	0.555
私は人がどう思っても、平気で自分の信じたままをどしどし実行する。	0.274	0.266	-0.020	0.484
私は人から甘えっ子だと思われている。	0.219	0.126	0.083	0.473
私は人に対して興味や同情心を持たない。	0.205	-0.132	0.250	0.424
固有値	3.507	2.769	2.158	1.846
寄与率（%）	14.600	11.500	9.000	7.700

因子1：敵対・支配

因子2：被評価意識・積極性

因子3：孤立・独立

因子4：依存・親和

表3 基本的対人態度測定インベントリーの得点の平均値

	全体	因子1	因子2	因子3	因子4
	828名	敵対・支配	被評価意識・積極性	孤立・独立	依存・親和
項目の平均値		10.0	12.0	14.0	12.0
高校生の平均値		7.4	10.6	11.7	14.1

### B : Positive feeling-Negative feeling (PF vs. NF) の現状

「普段の学校生活で最もよく感じる感情」に焦点を当て、記述式アンケートの結果を表5と表6に示す。感情の分類は山内(1975)によってリストアップされた51の情動表現語を採用し、さらにそれらをKJ法によりPFとNFに分類した(図3)。その際、分類に客観性を求めるために、本研究以外にA大学大学院生3名を追加して合議で行った。その結果先ず第1の特徴は、一日の大半を過ごしている学校での生活を“いらいら”や“不安”といった否定的感情で過ごしている高校生が半数を超え、そして第2の特徴はその原因は進路や学業が主ではなく、対人関係(57%:友人>家族>教師)にあるという点である。

更に、学校で感じた感情はそれ以外の生活にも影響を及ぼしており、433名中85%(369人)の生徒が影響を及ぼしていると回答し、及ぼしていると思わないと答えた生徒は15%(64名)であった。この傾向は、感情傾向はいったん形成されると、持続的な心的構造に成り易いとする McDougall 理論に合致する。

#### (2) 「基本的対人態度インベントリー」と「感情」の相互作用

まず、基本的対人態度測定インベントリーの各下位尺度での平均得点を算出し、感情ワークシートの記述結果を数値に変換した後、PF群とNF群とで差異が見られるかどうかを比較した(t検定)(表7)。その結果、「敵対・支配」および「孤立・独立」において有意差が見られ( $P<.001$ )、NF群がPF群に比べて「敵対・支配」、「孤立・独立」の対人態度得点が高かった。「被評価意識・積極性」および「依存・親和」では、両群の間で有意差は見られなかった。このことは、「人々に対して動く」および「人々から離れて動く」という態度をとる人は、否定的感情を持ちやすいという K. Horney の理論を支持している。また、表8は行動観察により得られた記録を整理したものである。

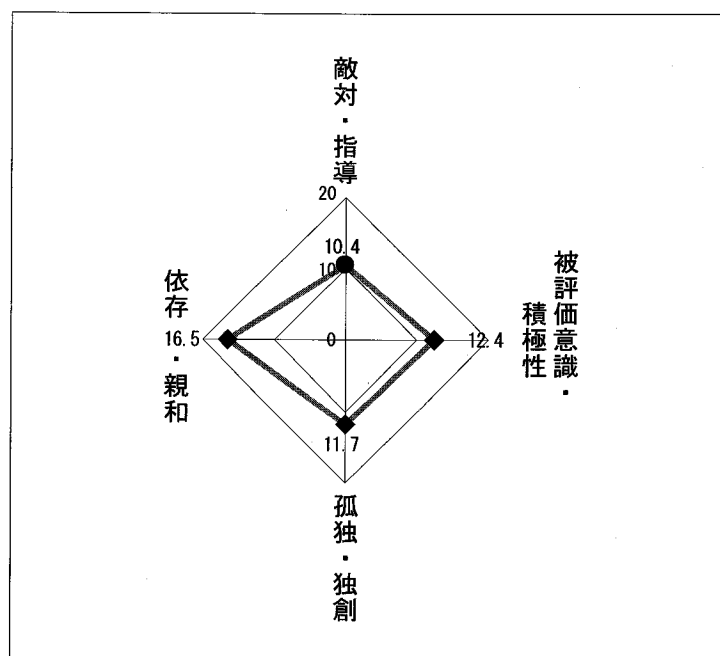


図1 基本的対人態度測定インベントリー各項目のバランス

表4 基本的対人態度測定インベントリーの結果（1964年青年との比較）

	人数	T 型	A 型	I 型	g / p
青年	405	22.4	20.8	20.5	1.5
幼稚園保母	24	24.0	17.4	19.2	1.6
現代高校生	828	20.0	15.4	15.9	1.3

g/p : gは good の意味であり, T A I に関係なく, 好ましい対人関係 (素直, 尊敬される, 1人で仕事をするなど) であり, pは poor の意味で T A I に関係なく好ましくない対人関係 (甘え, 喧嘩口論, 人嫌いなど) である。よって, この値が1.5よりも高ければ好ましい対人関係をとれる傾向にあり, それよりも低ければ好ましくない対人関係をとる傾向にあると見ることができる。ただし, この得点は当時の算出方法による。

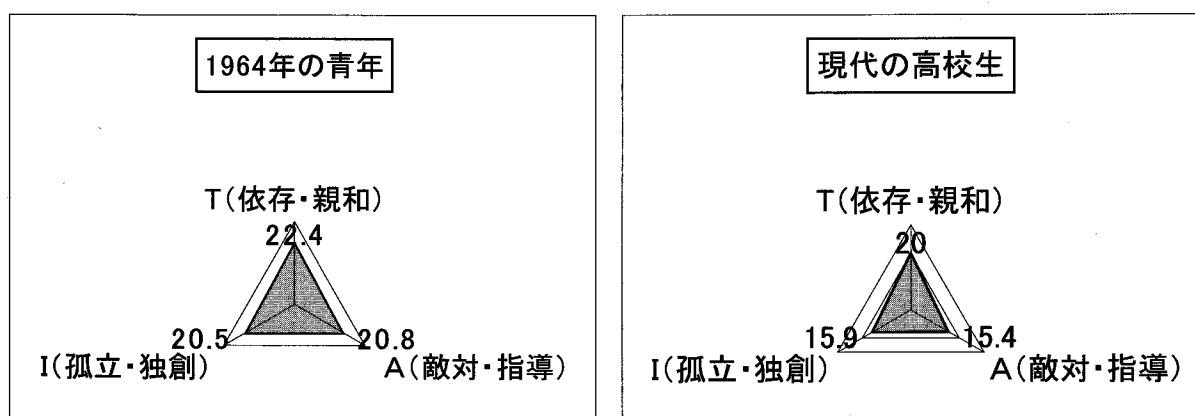


図2 1964年の青年と現代高校生の基本的対人態度3特徴のバランス

表5 現代高校生の感情分析結果

	P F (肯定的感情)	N F (否定的感情)
人数	263人	319人
割合	45%	55%

表6 感情を左右する要因の結果

感情を左右する要因	人数	割合
1. 友人・家族・教師といった対人関係	333人	57%
2. 自分自身の行動や考えといった自己要因	111人	19%
3. 自分の将来や上記1～3以外の要因	80人	14%
4. 学校・学級といった学校環境	858人	10%

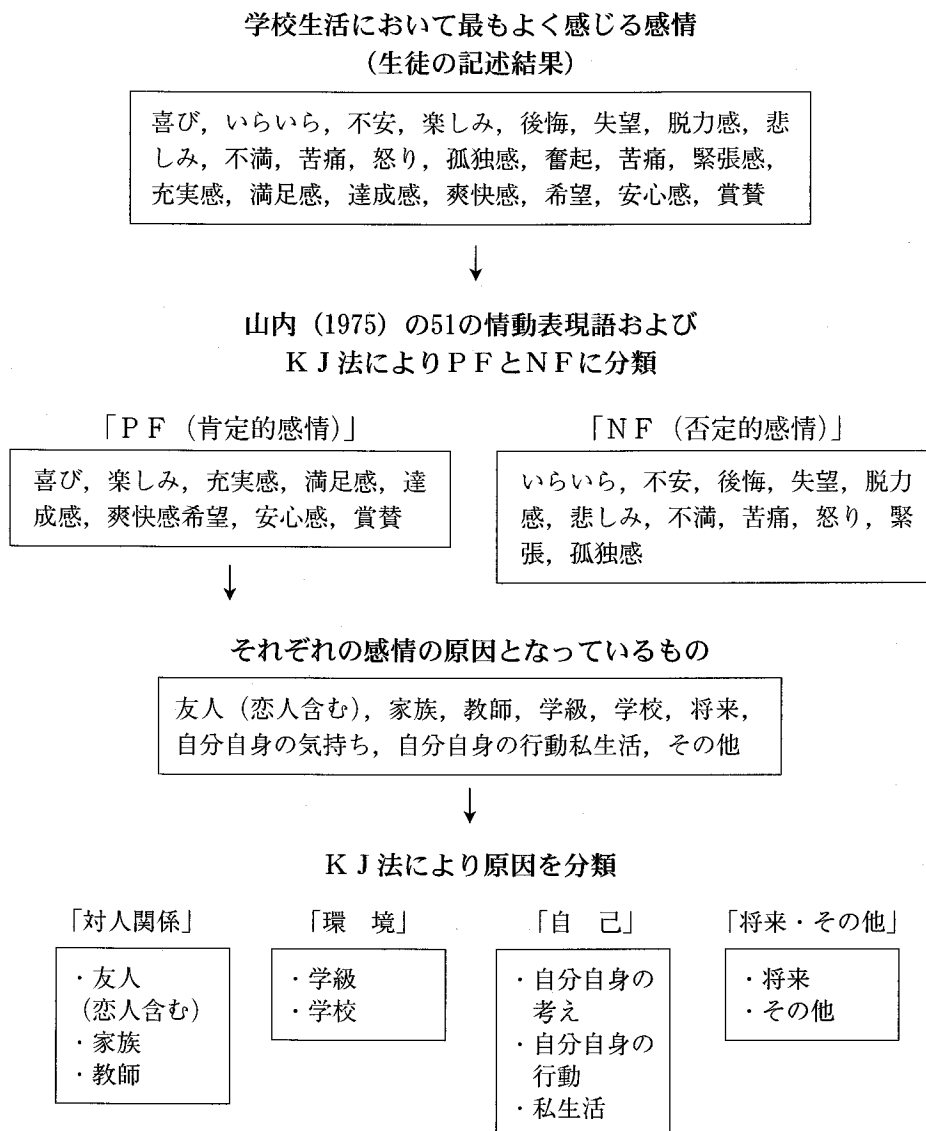


図3 感情に関するワークシートのまとめ方に関するフローチャート

表7 感情と基本的対人態度測定インベントリー得点

	PF (肯定的感情)		NF (否定的感情)	t 値	
敵対・支配	9.592(4.150)	<	11.58 (4.509)	-5.219	***
被評価意識・積極性	10.929(3.540)		10.451(3.835)	1.475	n.s
孤立・独立	10.275(4.553)	<	12.888(4.821)	-6.35	***
依存・親和	10.633(2.744)		10.934(2.823)	-1.23	n.s

( ) 内は標準差

(\*\*\*) p &lt; .001



表8 P Fの高い高校とN Fの高い高校の特徴（行動観察の記録のまとめ）

P Fの高い高校における生徒の特徴	N Fの高い高校における生徒の特徴
<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の目標が具体的である。</li> <li>・挨拶や清掃活動など基本的な生活習慣ができている。</li> <li>・学習に対する姿勢（ベルが鳴ったら着席する、忘れ物をしない、課題をやってくる）がある程度整っている。</li> <li>・部活動や校外活動への参加が積極的である。</li> <li>・努力することをそれ程面倒だと思わない。</li> <li>・縦の人間関係と横の人間関係のつながりを区別して接することができる。</li> <li>・物事を最後までやり遂げることができる生徒が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の目標がおおざっぱである。</li> <li>・基本的な生活習慣の指導をしなければならない。</li> <li>・学習に対する姿勢（ベルが鳴ったら着席する、忘れ物をしない、課題をやってくる）ができていないことが多い。</li> <li>・部活動や校外活動への参加が消極的である。</li> <li>・劣等感を持っている生徒が多い。</li> <li>・縦の人間関係と横の人間関係のつながりを区別して接することがあまりできない。</li> <li>・物事を最後までやり遂げようとする姿勢はあるものの、あきらめることも多い。</li> </ul>

## V 考 察

### 1) A：基本的対人態度インベントリー

感情ワークシートの分析から、通常の学校生活における感情を左右している要因は特に友人関係であるという結果を得た。総理府青少年対策本部が行った「心をうちあける友人の有無」「親友数」「親友の有無」「友人関係の満足度」等（表11～12）の変遷をみると、調査の年によって設問の仕方や回答の選択肢、調査対象者の年齢に多少の相違があるので、直接的な比較は困難であるが、友人の数は徐々に増える傾向にあるように見受けられる。しかし、久世（1990）は、数は増えているけれども親友というものの中身が変化し、関係はかなり表面的になってきていることを指摘している。現代の青年にとって親友とは、軽いおしゃべり、スポーツ、音楽や趣味が共有でき、しかも互いのプライバシーへは深くは入り込まず、本音や人生の岐路に関わるような難しい話はしないという質の変化が生じている。

本研究における基本的対人態度インベントリーの特徴を見ると、リーダーシップを取るような積極性はないが孤立はしたくないという「依存・親和」に偏っていて、その結果として「敵対・支配」といった対人的反発行動の得点が非常に低く出ている。佐藤（1995）は今日の中学や高校の女子生徒の多くは特定の友達を持って一緒に行動することが多いことを指摘しており、例えば教室の移動や昼食の時間、トイレなどに数人の友人と連れだって行動することはよく知られた行動パターンである。そして女子高生がこのような特定の友人関係すなわち「グループ」に所属する理由は、一人であることを恐れる気持ちが内在し、一人であることによって人づきあいができない人、変わった人と見られたくないという不安感にあるとした。「依存・親和」の得点が高く、「敵対・支配」、「被評価意識・積極性」、「孤立・独立」の得点が低い行動スタイルは、現代日本の高校生の特性をストレートに現している。そして基本的対人態度における、1964年の3因子構造が、現代の高校生では4因子構造に変化しており、対人態度の構造そのものが大きく変化していると思われる。これらの変化の背景には、社会における生産形態や生活感情の変化など多くの要因が当然関わっている。

表9 心をうちあげられる親友の有無 (%)

	1955	1970	1975
い る	66.9	75.6	78.1
いない	33.1	24.3	21.8

(備考) 総理府広報室「青少年の社会的関心」(1955), 総理府青少年対策本部「青少年の連帯感などに関する調査」(1970, 1975)による。

表10 親友数の変化 (%)

	1980 a		1980 b	1985	1986	
	在学生	有職者			大学生	有職者
1 人	10.9	13.0	10.7	18.3	6.2	9.4
2～3人	42.7	54.2	58.1	54.4	31.9	44.6
4人以上	37.6	22.6	24.6	29.8	58.7	43.0
1人もいない	8.8	10.2	6.6	7.6	3.2	2.3

(備考) 総理府広報室「将来選択期(15～19歳)における青少年の意識調」(1980 a), 総務庁青少年対策本部「現代青年の生活志向に関する研究調査」(1986), 総理府(総務庁)青少年対策本部「青少年の連帯感などに関する調査」(1980 b, 1985)による。

表11 親しい友人の有無 (%)

	1998
い る	98.9
いない・わからない	1.1

(備考) 総務庁青少年対策本部「第6回世界青年意識調査」(1998)による。

表12 友人関係満足度 (%)

	1972	1977	1984	1998
「満足」+「やや満足」	83.9	83.9	89.8	96.7
「やや不満」+「不満」	16.1	15.8	7.1	3.3

(備考) 総理府青少年対策本部「世界青年意識調査」(1972, 1977, 1984, 1998)による。

## B：肯定的感情と否定的感情

感情は、内的感覚と社会的条件とが融合して経験され、当人の内的状態の極めて重要な要素であると同時に、対人的関係の性質を最もよく表示している（北山，1998）。北山（1998）によれば、感情経験には当人がどの程度、現前の社会的関係に積極的に関与しようとしているか、あるいはそれから自分を引き離し、関与しないようにしようとするかについての行動を含むという。例えば、優越感、自惚れ、怒り、欲求不満といった感情は、関係性から自己を切り離そうとする動機づけを伴い、同時に、そのように動機づけられた関係性の中で生じがちである一方、親しみ、尊敬、恥、負い目といった感情は関係性の中に自己を埋め込もうとする動機づけを伴い、そのように動機づけられた関係性の中で生じがちであるとする。生理的喚起、快・不快といった内的感覚は、そこにある関係性の中で統合され、意味づけられ、幸せ、怒り、親しみ、甘えなどといった個別の感情へと分化していくと考えられる。本研究の感情ワークシートに現れる感情が positive であれ negative であれ、その感情を最も左右している要因は、友人、家族、教師という対人関係であった。次いで自分自身の行動や思考という自己の要因であるが、これもやはり社会や自己を取り巻く環境との関係性から生じる。藤井（2001）は現代の高校生は、自己より他者の存在を気にする傾向が強いことを指摘している。学校での感情が、放課後の生活や自宅に帰ってからの生活にそのまま影響しているということも明らかとなった。

教育現場でも週休二日制が実施され数年が経ったが、本来の目的としていた「ゆとり」は得られていない。授業時数の確保のために休日返上の特別時間割が実施され、学力低下、部活動、対外試合、大会の増加に加え校内暴力や非行と stressor の枚挙にいとまがない。まさに、生徒以上に教員も毎日こなさなければならない仕事とストレスにさらされている。

## 2) 基本的対人態度と感情に関する考察

本調査から、現代日本の高校生の「基本的対人態度」と「感情」は深く関っており、「感情」を左右する最も強い要因が対人関係である事が明らかとなった。従って、対人関係の改善は高校生活全体に強い影響力を持ち、他要因の改善にも繋がる事を示している。「被評価意識・積極性」と「依存・親和」の得点を各感情別に比較したところ、差異は見られなかったが、「敵対・支配」および「孤立・独立」の両得点は、否定的感情と有意な相関を示している。また、「被評価意識・積極性」と「依存・親和」という対人態度は、現代日本の高校生にとって感情とそれ程関係なく、ごく一般的に見られる対人態度になってきているのであろう。他人にどう見られているのか絶えず意識し、自分の居場所、頼れる所を求める対人態度は、日常的に行われる活動に変容して消極的な行動へも影響を及ぼしている。

## VI 結 語

本研究は、K. Horney の理論を取り入れて作成された西平（1964）の基本的対人態度測定インベントリーを用いて40年間という間隔を置いて実施し調査を行い興味深い知見を得た。因子分析をし直した結果、40年前の青年とは因子構造そのものが変化しており、信頼性 (reliability) のみならず構成概念妥当性 (construct validity)、基準関連妥当性 (criterion-related validity) を今後再検討し、現代の高校生用の基本的対人態度の分類および尺度の再構成が必要である。また時代間の相違については具体的に提示できたものの、現代の高校生に対する介入や支援の具体的方法については今後の課題である。

## 引用文献

- 1) Duck, S. 1998 (和田実訳) コミュニケーションと人間関係 ナカニシヤ出版
- 2) 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 3) 学校不適応検討委員会 1991 学校不適応検討委員会第一次報告書 文部省
- 4) Horney, K. 1942 (霜田静志他訳) 自己分析 誠信書房
- 5) Horney, K. 1945 (我妻洋他訳) 心の葛藤 誠信書房
- 6) Horney, K. 1950 (榎本譲他訳) 神経症と人間の成長 誠信書房
- 7) 伊藤克彦 1988 登校拒否 西平直喜・久世敏雄(編) 青年心理学ハンドブック 福村出版
- 8) 岩井勇児 1983 青年をめぐる社会的状況 堀ノ内敏(編著) 青年心理学 福村出版
- 9) 北山忍 1998 自己と感情 共立出版株式会社
- 10) 久世敏雄 1990 変貌する社会と青年の心理 福村出版
- 11) 文部科学省 2003 学校基本調査 第5章 不登校
- 12) 村上靖彦 1981 対人恐怖 清水将之(編) 青年期の精神科臨床 金剛出版
- 13) 西平直樹 1964 青年分析 大日本図書
- 14) 西園昌久 1977 対人関係論 精神医学19, 1224-1239.
- 15) 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究 44, 55-65.
- 16) 齋藤勇 1986 感情と人間関係の心理 川島書店
- 17) 佐藤有耕 1995 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学研究紀要, 3, 11-20.
- 18) 総務庁青少年対策本部 1993 世界の青年との比較からみた日本の青年 第5回世界青年意識調査報告書 大蔵省印刷局
- 19) 総務庁青少年対策本部 1998 世界の青年との比較からみた日本の青年 第6回世界青年意識調査報告書 大蔵省印刷
- 20) 山内弘継 1975 心理的測定のための情動語の分析1 人文学(同志社大学), 28, 85-110.